

平成三十一年度
名寄市立大学
一般入試 前期日程

小 論 文 問 題

試験時間 一〇時〇〇分～一一時三〇分（九〇分）

*受験上の注意

- ① 指示があるまで開いてはいけない。
- ② 指示に従って、静粛に行動すること。
- ③ 机上には、センター試験受験票、本学受験票、筆記用具、消しゴム、鉛筆削り、時計、眼鏡、目薬、袋・箱から出したティッシュペーパー以外、不要なものは置かないこと。
- ④ 質問、用便その他、特に必要のある場合は黙って手を挙げ、指示を求めること。
- ⑤ 不正を行ったものは試験を中止し、以後の受験資格を失うものとする。

次の文章を読み、あとの間に答えなさい。

「コミュニケーション能力」なる言い回しがはらむ問題性を鋭く指摘する議論がある。つまり、コミュニケーションとは関係性において本来立ち現れるものであるのに、それを個人に内在する能力として位置づけることに無理があるというのである。このように論を展開する貴戸は「関係性の個人化」という用語で巧みにこの言説現象をとらえた（貴戸 2011）。このように考えるならば、コミュニケーションは個人に内在する能力としては本来測りようがないもの、ということになる。A君とは話が合うが、Bさんとは話が続かない、といったことは誰しもが経験するものである。A君と話していれば、彼はコミュニケーション能力が高いように見えるし、Bさんといるところを評価されれば、彼はコミュニケーション能力が低く見えるであろう。この議論からも、コミュニケーション能力が容易に測れないことは自明のようにも見える。

しかし、こうした思いとは裏腹に、「コミュニケーション能力があるかどうかくらい、ちょっと見ればなんとなくわかるんじゃないか」という日常感覚も、実は非常に広く社会に浸透しているように思われるのだ。

（中略）

それは若者やネット上で広く流布した「コミュ障」という言葉にも典型的に表れている。「コミュニケーション障害」を略してこう呼ぶのだが、本来の医学的用語の範囲を超えて、もっと広く気楽に使われる言葉となっている。簡単にいつてしまえば、他人との会話のやり取りが苦手そうな人を指して、「あいつはコミュ障だから……」とか「自分はコミュ障なので……」などと使われているようである。このような使われ方に見られるように、コミュ障はコミュニケーション能力が低いこととほぼ同義である。そして、「コミュ障」という語の気楽な使われ方加減からすれば、人々はコミュニケーション能力の多寡を、かなり容易に判断しているということになる。

インターネットで検索してみれば、コミュニケーション能力をいかに鍛え、その能力の低い人はいかにそれを克服するかということに、多くの人たちの関心が寄せられていることを感じることができる。例えば、「日本コミュニケーション能力認定協会」なる団体がある。この団体ではコミュニケーション能力認定講座が提供され、それを受講し試験に合格することによって、一級とか二級といった資格を取得できることになっている。ここではすでに「資格」という形で、コミュニケーション能力の有無ないし多寡が認定されることになっている。つまり、理論的には破たんしているようにさえみえるコミュニケーション能力の測定も、日常感覚的には測定可能と判断されているように見えるのだ。

こうした社会の風潮に対して抗うことに相当の困難があることを、私自身も実感したことがある。私の勤める大学のある学生は「自分にはコミュニケーション能力がない」というのだが、それを説明するのに彼女は実に滔々^{とうとう}と流暢に話し続けたのである。私が「それだけ自分の状態をきちんと説

明できるのだから、コミュニケーション能力は十分あるんじゃない？」といっても、本人はどうも腑に落ちない顔をしていたのが印象的だった。佐藤は、「コミュニケーション能力」は個人に付随する能力としてはその実在さえあやしいものであるがゆえに、かえってそれがいったん「ある」ことになる、幽霊を怖れるようにある種の不安をあおってしまうと指摘しているが(佐藤編 2010)、まさにそれが実際に生じていることを強く示唆する事例である。

(「暴走する能力主義―教育と現代社会の病理」中村高康著 ちくま新書 二〇一八年より)

問 「コミュニケーション能力」を測ることについて、あなたが考えることを八〇〇字以上千字以内で述べなさい。